

— 茨城県土浦市 —

中根遺跡

— 店舗建設事業に伴う —
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

有限会社ヤマダイ商事
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会

— 茨城県土浦市 —

なか ね い せき
中根遺跡

— 店舗建設事業に伴う —
埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

有限会社ヤマダイ商事
土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会



1号住居跡



3号住居跡出土壺

序

土浦市は葭ヶ浦や桜川など水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には集落跡や貝塚、古墳などの遺跡が数多く存在しています。遺跡は当時の人々の生活や環境などを知る手がかりとなり、また、現代に生きる我々が、豊かな生活を送ることができる先人の業績もあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためには重要なことです。

この度、有限会社ヤマダイ商事の店舗建設に伴い、中根遺跡の一部について記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の成果は本文に記載されているとおりですが、土浦市における古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、有限会社ヤマダイ商事をはじめ、関係者の皆様のご協力とご支援に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成21年10月

土浦市教育委員会
教育長 富永 善文

例 言

1. 本書は土浦市右初字中根1461-2番地他に所在する、中根遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は有限会社ヤマダイ商事の委託を受け、土浦市遺跡調査会（会長須田直之）が実施した。
3. 調査期間は1997(平成9)年3月25日から4月10日である。その後整理作業を行った。
4. 発掘調査は関口満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当し、当館学芸員（石川功、黒澤春彦、比毛君男）が補佐した。整理は福田礼子（当館臨時職員）が担当した。
5. 本書の編集は福田と黒澤が行ない、関口が補佐した。
6. 本書の執筆は第1章・第5章を黒澤、第2章第2節を加藤寛生（土浦市遺跡調査会調査補助員）と黒澤、第2章第1節、第3章、第4章、第6章を福田が行なった。
7. 整理作業は、遺物実測から図版作成を福田・加藤、遺物写真撮影を黒澤がおこなった。
8. 調査及び報告書作成には下記の諸機関・方々よりご協力・ご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。
有限会社ヤマダイ商事 茨城県教育庁文化課 塚原悦男 深田恵一 関口友紀 中野耕太郎 薩野一之
9. 本遺跡の出土品、報告書作成に伴う資料は全て上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管する。

凡 例

1. 中根遺跡の記号は「右側所在の中根遺跡」からMNとした。
2. 造構図中の断面図・土層図脇の数値は海拔高を表し、単位はmである。
3. 造構図中で、スクリントーンは焼土、一点鎖線は硬化面、破線は推定線を表す。
4. 遺物実測図で、スクリントーンは赤色、中心線が一点鎖線のものは回転（復元）実測を表す。
5. 土層観察・遺物色調における色相の判断は「新版 標準上色帖」（日本色研社株式会社）を使用した。
6. 造構図中の土器を結ぶ実線は接合関係を示す。
7. 遺構・遺物の縮尺は原則として下記の通りである。その他の場合も図に明記してある。
遺構-住居跡：1/60・1/30（炉・Pit） 遺物-土器：1/3 清：1/100・1/40 土製品：1/2
8. 本文・表中の（ ）は現存値、〔 〕は推定値を表す。

調査者名簿

発掘調査

主任調査員	関口 満（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）
調査補助員	加藤寛生（国学院大学学生） 著松亮太（筑波大学学生）
調査作業員	塚田まさ 小野寺悦子 小野寺奈央 田上純子 鮫田志満子 小柳道雄
整 理	
調査員	福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員） 黒澤春彦 関口 満
調査補助員	加藤寛生
整理作業員	大坪美知子
事 務	鈴木ひとみ

土浦市遺跡調査会組織（平成8・9年度）

会長	須川直之 土浦市文化財保護審議会長
副会長	尾見彰一 土浦市教育委員会教育長
理事	大塚 博 土浦市文化財保護審議会委員／廣田宣治 土浦市参事兼企画調整課長／五頭英明 同企画調整課長／内海崎保生・出地隆治 同区画整理課長／坂入 勇 同建築指導課長／野口幹雄・石神進一 同都市計画課長／金塚文雄・細川俊雄 同耕地課長／大塚重治・内海崎保生 同上木課長
監事	中川茂男 土浦市教育委員会教育次長
幹事長	小野政大 同監査事務局長
幹事	宮本 昭 土浦市教育委員会文化課長 矢口俊則 上高津貝塚ふるさと歴史の広場副館長／萩島 優 当市教育委員会文化課課長補佐／小貫俊男 同主査兼文化財係長／樋 陽介・塙谷 修・石川 功・黒澤春彦・関口 満（事務・出納担当）・橋場君男 上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員／宮本礼子 当歴史の広場・市教育委員会文化課学芸員／中澤達也 当市教育委員会文化課学芸員

目 次

口絵	
序	
例言 凡例 調査者名簿	
土浦市遺跡調査会組織	
目次 挿図目次 写真図版目次	
第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の概要	6
第4章 造構と遺物	8
第5章 総括	19
第6章 おわりに	23
報告書抄録	24
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺地形図	2
第2図 周辺の遺跡	4
第3図 基本層序	6

第4図 調査区全体図	7
第5図 1号住居跡出土遺物	8
第6図 1号住居跡	9
第7図 2号住居跡出土遺物	10
第8図 2号住居跡	11
第9図 3号住居跡	13
第10図 3号住居跡出土遺物	14
第11図 4号住居跡	15
第12図 4号住居跡出土遺物	15
第13図 1号溝出土遺物	16
第14図 1号溝 2号溝	17
第15図 遺構外出土遺物	18
第16図 花室川下流域の 弥生時代・古墳時代前期集落跡	21

写真図版目次

PL.1	調査前状況 調査終了全景
PL.2	1号住居跡完掘 1号住居跡遺物出土状況 2号住居跡完掘
PL.3	3号住居跡完掘 3号住居跡遺物出土状況
PL.4	4号住居跡完掘 1号溝完掘 2号溝完掘
PL.5	出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

1996(平成8)年12月、事業者である有限会社ヤマダイ商事より、市内右側字中根1641-2外で計画している開発行為の事前協議申請書が提出された。申請地は周辺を含め周知の遺跡ではない場所であった。土浦市教育委員会（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）で現地踏査を行なったところ、土師器など土器の散布がみられ、また、樹枝状に延びた谷津に面した台地上であるため、地形から見ても遺跡の存在する可能性が考えられると判断した。

翌1997(平成9)年2月25日、事業者の協力を得て、遺跡の有無や、遺跡が確認された場合の密度や性格等を把握するために試掘確認調査を行なった。その結果、申請地の一部で住居跡が確認され、弥生時代から古墳時代の集落跡であることが判明した。新発見の遺跡のため字名から「中根遺跡」と命名し、2月26日付けで遺跡発見の通知（文保法第57条の6）を文化庁長官宛に提出した。

その後、試掘確認調査の結果をもとに事業者と協議を行なったが、現状保存が困難であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意した。2月下旬、事業者から埋蔵文化財発掘の届出（文保法第57条の2）が提出され、3月1日付けで文化庁長官宛に進達した。発掘調査は土浦市遺跡調査会（会長 須田直之）が行なうこととなり、3月22日に両者で契約を締結した。埋蔵文化財発掘調査の報告（文保法第98条の2）は、3月26日付けで文化庁長官宛に提出した。

発掘調査は上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員の岡口満が担当し、当館学芸員や臨時職員が補佐した。調査日数は11日で、経過は以下の通りである。

1997(平成9)年

- 3月25日 表土除去と器材搬入を行なう。
- 3月26日 本日から作業員を入れた調査となる。遺構確認後、1号溝検出開始。
- 3月29日 1号溝完掘。1号住居跡検出開始。
- 4月1日 3号住居跡検出開始。
- 4月2日 1号住居跡遺物取り上げ。
- 4月4日 1号住居跡、2号溝完掘。
- 3号住居跡遺物取り上げ。
- 4月8日 2号住居跡検出開始。
- 4月9日 3号住居跡完掘。
- 4月10日 2号住居跡、4号住居跡完掘。

調査終了写真撮影。

発掘調査が終了し器材を撤収する。

調査終了後の4月17日付けで、土浦市遺跡調査会から提出された埋蔵物発見届を土浦警察署長宛に、発掘調査終了確認依頼を県教育長宛に進達した。



作業風景



第1図 遺跡周辺地形図（1/5,000：1990年）

第2章 環 境

第1節 地理的環境

本遺跡が所在する土浦市は茨城県南部に位置している。土浦市は東に霞ヶ浦、北西に筑波山を望み市内中央を流れる桜川により形成された低地を中心として発展してきた都市である。この低地の北部は新治台地、南部は筑波稲敷台地と呼ばれ、土浦市はこれら低地と台地により構成されている。筑波稲敷台地の北側には霞ヶ浦へと注ぐ花室川が流れおり、これによって河川沿岸の台地両側は複雑に開析され、狭い谷津と小規模の台地が数多く形成されている。土浦市域に当たる下流域の台地は、標高23~25mで低地との比高差は約18~20mである。本遺跡は、この花室川右岸の小規模な台地上、標高約21mに位置している。表土は30cm前後で、その下にソフトローム層、ハードローム層が堆積している。ローム層は2m前後である。

第2節 歴史的環境

中根遺跡の位置する花室川水系の台地上には、旧石器時代からの遺跡が多数存在している。ここでは中根遺跡周辺に分布する主な遺跡を時代ごとに概観することとする。

旧石器時代の遺跡としては、右岸に宮前遺跡(45)、向原遺跡(32)などがあり、向原遺跡からは黒曜石のブロックが検出されている。左岸の和台遺跡(3)、永国遺跡(5)、阿ら地遺跡(6)、内出後遺跡(13)からはナイフ形石器が出土した。また、この流域はナウマン象の化石が発見されることで知られている。

縄文時代の遺跡は多く、早期では右岸に形部遺跡(47)、南丘遺跡(69)、内路地台遺跡(54)などがあり、左岸には永国遺跡、阿ら地遺跡などがある。内路地台遺跡からは炉穴が検出された。前期の遺跡は、右岸に権現前遺跡(44)、石切貝塚東遺跡(46)、形部遺跡など、左岸には内出後遺跡、神出遺跡(15)などがある。権現前遺跡と形部遺跡からは、市内で検出例の少ない浮島式期の住居跡が検出され、内出後遺跡からは石製の扶状耳飾りが出土した。貝塚では関山式期の烏山貝塚(65)がある。中期の遺跡は谷津の奥に多く、宮前遺跡、扇ノ台遺跡(37)、摩利山遺跡(41)のように大形土坑を伴う大規模な集落がみられる。左岸の和台遺跡からは長軸10mを越える大形の住居跡が検出された。後期の遺跡としては峰崎遺跡群(40・41)などがあるが、中期に比べると減少する。

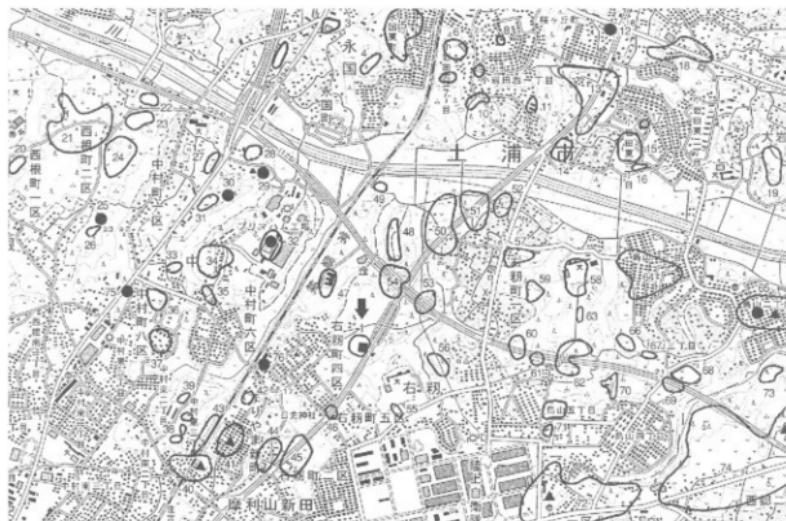
弥生時代の遺跡は少なく、右岸には本遺跡のほか烏山遺跡、左岸には永国遺跡、和台遺跡などがある。これらの遺跡では発掘調査が行なわれており、烏山遺跡や和台遺跡からは後期前半の住居跡、本遺跡や永国遺跡からは後期後半の住居跡が発見されている。いずれも小規模な集落であり、長期継続はみられない。

古墳時代になると遺跡は増加する。前期では本遺跡の他、坪平遺跡(51)、永峰遺跡(58)、烏山遺跡、向原遺跡、堂場台遺跡(20)、左岸には内出後遺跡、永国遺跡、和台遺跡などがある。烏山遺跡では前期の玉作り工房跡が7軒確認されており、瑪瑙を材料とした勾玉や碧玉などを材料とした管玉などの玉作りが行なわれていた。中期から後期の遺跡も多く、市内有数の密集地帯である。形部遺跡、宮前遺跡、永峰遺跡、烏山遺跡、向原遺跡、永国遺跡、阿ら地遺跡、内出後遺跡、神出遺跡などから中期、後期の集落跡が発見された。烏山遺跡や向原遺跡は前期から続く集落である。

古墳は、石倉山古墳群(65)、大日・浅間古墳(25)、向原古墳群(32)、馬道古墳群(29)、南達中古墳(30)などがあり、石倉山古墳群や向原古墳群は終末期の古墳群である。馬道古墳群や南達中古墳からは、円筒埴輪が出土している。前期の古墳は現在のところ確認されていない。

奈良・平安時代の遺跡が多く、右岸に念代遺跡(50)、長峰遺跡、烏山遺跡、南丘遺跡、西郷遺跡、扇ノ台遺跡など、左岸には神出遺跡、永国遺跡、内出後遺跡がある。扇ノ台遺跡や烏山遺跡からは多数の掘立柱建物跡が検出され、ともに撲点の集落であったことがうかがえる。内路地台遺跡では火葬墓が発見されている。

中世の遺跡も館跡など多くの遺跡が確認されている。右切館跡(53)では堀及び土塁が確認されたが、建物



第2図 周辺の遺跡 (1/25,000) ▲貝塚 ●古墳(群) (国土地理院発行 1/25,000に加筆)

と思われる遺構は検出されていない。念代遺跡では地下式壙が4基確認されており、内耳鏡片や瀬戸陶器瓶子底部片が出土した。西郷遺跡では掘立柱建物跡、道路跡、井戸などが確認されており、内耳鏡や瀬戸系陶磁器などが出土している。左岸の神出遺跡からは碇石を使用した掘立柱建物跡や、多数の地下式坑が検出された。内出後遺跡からも土坑や溝、柱穴群などが検出され、青磁の平挽などが出土した。

近世では、水戸街道の一里塚である嵩久保一里塚(75)が、中村宿の北端に存在していた。この他、右利十三塚など信仰の塚も多く見られる。

以上のように花室下流域一帯は旧石器時代からの遺跡が密集する地域である。これは霞ヶ浦や花室川、樹枝上の谷津を形成した湧水など豊富な水資源が、集落形成に大きくかかわっていたためと思われる。

遺跡一覧表

(旧：旧石器 繩：縄文 弓：弥生 古：古墳 平：余良・平安 中：中世)

No	遺跡名	旧	繩	弓	古	平	中	No	遺跡名	旧	繩	弓	古	平	中
1	中根遺跡			○	○		○	41	摩利山遺跡		○				
2	龜井遺跡				○			42	摩利山貝塚		○				
3	和台遺跡	○	○	○	○			43	峰崎A遺跡		○			○	
4	永国御灵遺跡				○			44	峰崎C遺跡		○			○	
5	永国遺跡	○	○	○	○	○	○	45	櫛現山遺跡	○	○			○	
6	阿ら地遺跡	○	○		○			46	宮前遺跡	○	○		○		○
7	才ノ内遺跡				○			47	右柄貝塚東遺跡		○				
8	桜ヶ丘遺跡				○			48	形部遺跡	○	○		○		
9	油麦田遺跡				○	○		49	牧の内遺跡				○	○	
10	いさろ遺跡				○	○		50	塚田遺跡				○	○	
11	谷畠遺跡					○		51	念代遺跡				○	○	
12	桜ヶ丘古墳					○		52	坪原遺跡	○	○	○	○	○	
13	内出後遺跡	○	○		○	○	○	53	沖の台遺跡			○	○		
14	南占屋敷館跡						○	54	右樹館跡						○
15	神出遺跡		○		○	○	○	55	内路地台遺跡		○		○		
16	中居遺跡					○	○	56	右樹宮塚遺跡				○		
17	東出遺跡					○	○	57	小谷遺跡		○			○	
18	霞ヶ岡遺跡		○		○	○	○	58	堂地塚遺跡		○		○	○	○
19	西の前遺跡				○	○	○	59	水峰遺跡				○		
20	堂場台遺跡				○	○		60	松原遺跡		○			○	
21	西根宮塚遺跡			○	○	○	○	61	宮塚遺跡					○	
22	西根平遺跡				○	○		62	数光遺跡		○		○	○	
23	諫訪遺跡				○	○		63	長峰遺跡		○			○	
24	平代地遺跡	○				○	○	64	長峰北遺跡						
25	大日・浅間古墳				○			65	烏山遺跡		○	○	○	○	
26	白楽遺跡				○	○		66	烏山遺跡		○	○	○	○	
27	南造中B遺跡				○	○		67	石倉山古墳群						
28	馬道遺跡			○	○	○		68	烏山貝塚						
29	馬道古墳群							69	北平南遺跡						
30	南達中古墳							70	北平北遺跡						
31	南達中A遺跡		○		○	○		71	堂後遺跡		○		○	○	
32	向原遺跡	○	○		○			72	南丘遺跡		○		○	○	
33	向原古墳群							73	小西遺跡		○			○	
34	谷原門B遺跡					○		74	烏山A遺跡					○	
35	谷原門C遺跡		○		○	○	○	75	烏山B遺跡					○	
36	谷原門A遺跡		○		○	○		76	一区北遺跡		○				
37	大神遺跡		○		○	○		77	一区北貝塚		○				
38	扇ノ台遺跡		○			○		78	立の越館跡					○	
39	木の宮南A～C		○			○		79	西瀬遺跡		○		○	○	
40	木の宮北遺跡		○					80	阿見貝塚		○				
	蜂崎B遺跡		○					81	嵩久保一里塚						近世
	蜂崎貝塚		○					82	右側遺跡		○				

第3章 調査の概要

1. 調査の概要

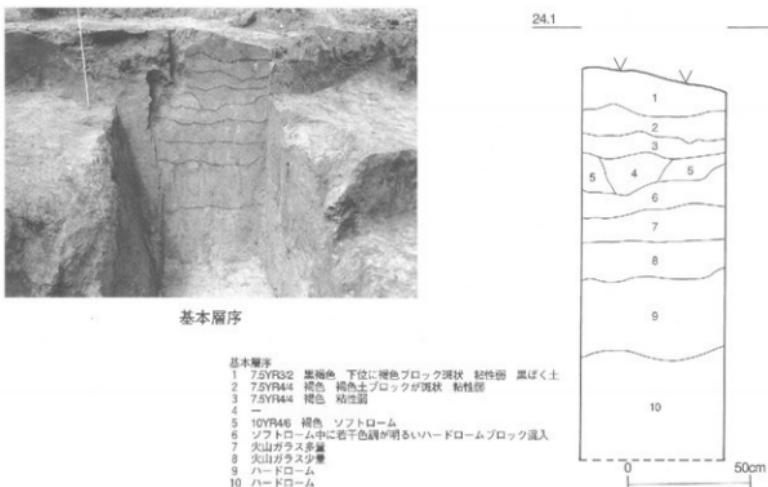
今回調査した中根遺跡は、試掘調査によって新たに発見された遺跡である。発掘調査で弥生時代後期後半の竪穴住居跡1軒、古墳時代前期初頭の竪穴住居跡3軒、中世の溝2条、時期不明の土坑1基を検出した。土坑については2号住居跡の覆土を掘り込んでおり、床面まで達しているが、土層のみの確認のため、平面形や規模は不明である。遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、中世陶器、土製品などで、コンテナ2箱分出土した。

2. 調査方法

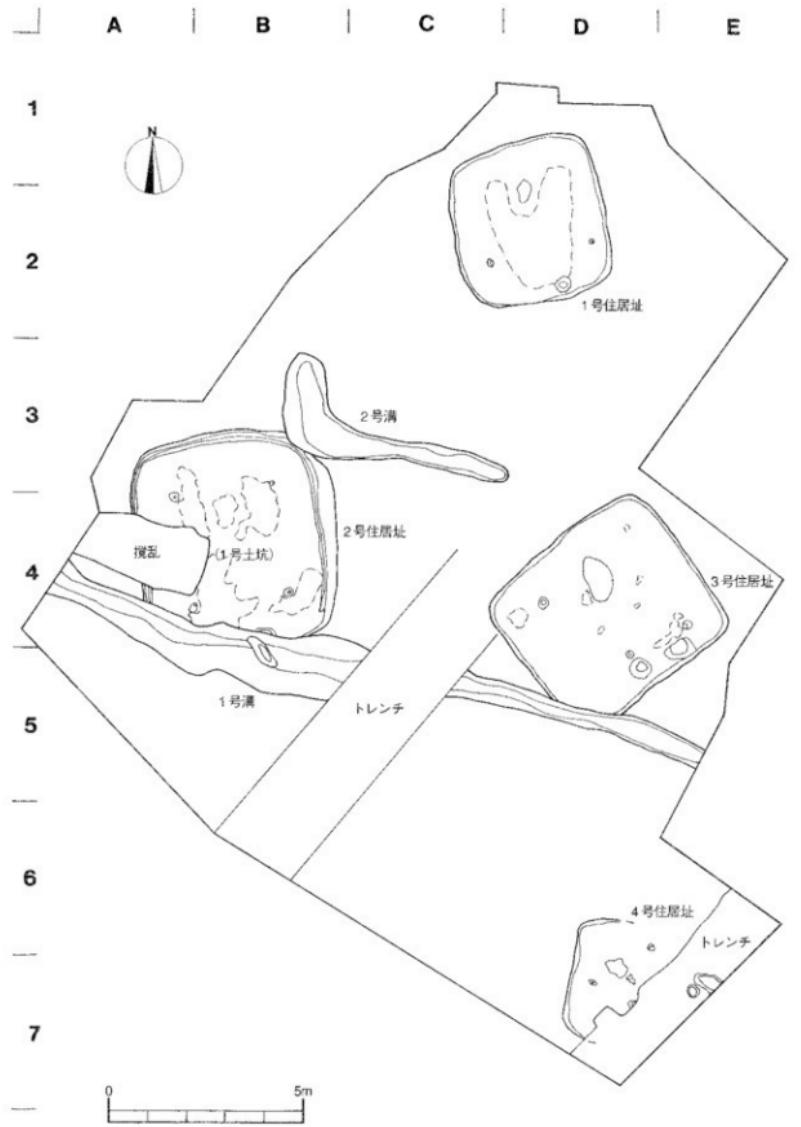
調査の方法は、重機で確認面まで表土を除去し、確認された遺構の検出を行った。竪穴住居跡は十字に上層観察用ベルトを設け、覆土上層から除去した。土層観察後、ベルトを除去し、出土した遺物の状況や完壊状況を図や写真で記録した。写真的フィルムはモノクロームとリバーサルである。

3. 基本層序

A-4グリッドの搅乱部の西側、調査区壁西面より基本層序を得た。トレチの幅は約60cm、深さはおよそ1m60cmまで掘り下げている。土壤分析は行なっていないが、同一台地上に位置する宮前遺跡の基本層序を参考に、土層の対比を行なってみたい。鍵となる火山ガラスが7層で多量に見られることから、姶良・丹沢火山灰(AT) 降下層に相当すると考えた。宮前遺跡では立川ローム第2黒色帶(BBⅡ) 上面でCATが得られていることから、7層はBBⅡ上部に該当すると想定し、ここから推して8層はBBⅡ下部、6層はソフト化したローム層、5層は立川ローム第1黒色帶(BBⅠ) と推察した。1~3層は耕作土。5層上面が遺構確認面である。



第3図 基本層序



第4図 調査区全体図

第4章 遺構と遺物

1. 住居跡

1号住居跡 (第5・6図 PL2・5)

位置 C・D-1・2グリッド。

規模・形状 長軸4.2m、短軸3.9mの縦長の隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは45cmを測る。

主軸方向 N-13°-W

ピット 3ヶ所検出された。配置からP-1・2は柱穴、壁際のピットは貯蔵穴と思われる。P-1は径15cmの円形を呈し、深さは21.1cm、P-2は径21cmの楕円形を呈し、深さは23.1cmを測る。P-1・2は対峙している。貯蔵穴は径44cmの楕円形を呈し、深さは31.8cmを測る。遺物は出土していない。

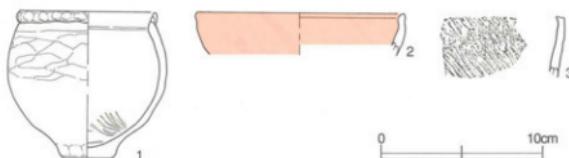
床 床面はほぼ平坦で、南側から柱穴の内側、か跡を囲むように硬化面が残る。また焼土がか跡の東側に散在しており、炭化材も見られた。

炉 中央北寄り、住居跡の主軸に沿うように位置する。床面を7cm程掘り込んで構築された地床炉で、長軸50.9cmの楕円形を呈している。炉跡の奥壁側覆土中に土器片がささった状態で出土していた。

覆土 8層に分層された。第8層は壁崩れ土と思われる。第1層を除いては全体に焼土粒・炭化物が混入している。

遺物 住居跡東半床面～覆土下位で散在していた。1はP-2覆土上面、2はか跡東側覆土中位、3はか跡北側床面直上で出土している。

所見 住居跡の形状とか跡の位置から南側が入り口部と想定される。出土遺物から時期は古墳時代前期前葉に相当しよう。



第5図 1号住居跡出土遺物

1号住居跡遺物観察表

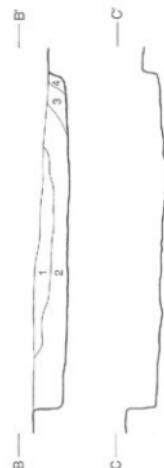
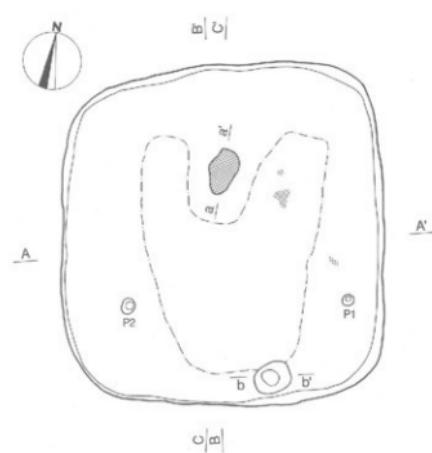
No	器種	法量(cm)	出土状況	色調	胎土	器形・文様・整形の特徴
1	鉢 土師器	A[8.3] B 9.0 C 3.2	P2上面 1/2	粗	長石多量、石英・雲母少量	折り返された短い口縁部はナデ後浅く押圧。下半もナデ。内面下半へナデ痕明顯に残る。
2	高杯 土師器	A[12.8] B(2.6)	覆土 1/6	暗赤褐色	1~2mmの黄色粒多量	口縁部直下浅くナデされる。内外面赤彩。
3	壺 甌生土器		床直上	灰黄褐色	長石中量、石英少量	附加条RL+L L L

2号住居跡 (第7・8図 PL3・5)

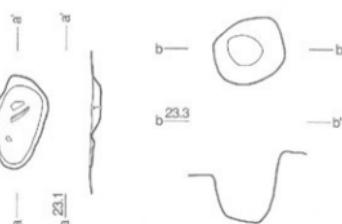
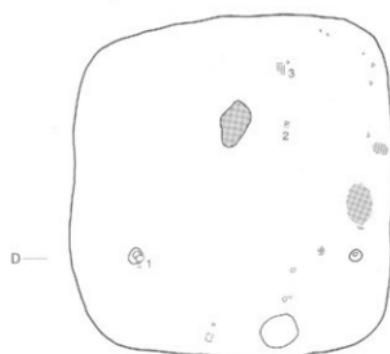
位置 A・B-3・4グリッドに位置し、南側で1号溝、北東側で2号溝と重複している。本跡のほうが古い。住居跡中央南寄りでは床面を一部壊して1号土坑が掘り込まれている。

規模・形状 長軸5.7m、短軸5.22mの縦長の隅丸方形を呈する。西壁は搅乱により中央部が壊されていた。壁は東側は外傾して立ち上がり、他はほぼ直線的に立ち上がっていた。深さは63cmを測る。

周溝 周溝は南側を除き全周し、おそらく搅乱部分も巡っていたと思われる。幅は10~30cm、床面からの深さは6~8cmを測る。



- 1 7SYR32 黑褐色 ローム小塊量、粒径量
 2 7SYR43 棕褐色 烧土粒微量、炭化物・特少量、ローム粉微量
 3 7SYR33 棕褐色 炭化物中量、ローム中・粒微量
 4 7SYR46 棕色 烧化物微量、ローム小・微量
 5 7SYR34 棕褐色 烧土粒微量、炭化物少量、ローム小・粒少量
 6 7SYR44 棕色 烧土粒中量、炭化物少量、ローム中少量
 7 7SYR46 棕色 烧土大・炭化物少量
 8 7SYR44 棕色 口一ム粒中量



- 1 2SYR33 棕赤褐色 烧土大・小量、粒中量



第6図 1号住居跡

主軸方向 N-2°-W

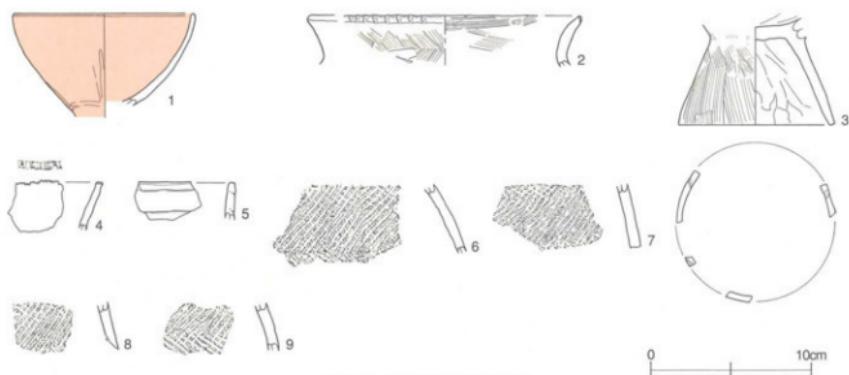
ピット 5ヶ所検出された。配置からP-1～4は柱穴、南壁沿いのピットは貯蔵穴と思われる。柱穴は円形・梢円形を基調とし、P-1は径13cm、深さ61.5cm、P-2は径27cm、深さ63.2cm、P-3は径27cm、深さ56.4cm、P-4は径25cm、深さ67cmを測る。深く掘り込まれている点と近似した深さから、主柱穴に相当しよう。貯蔵穴は梢円形を呈し径55cm、深さ43.9cmを測る。遺物は出土していない。

床 床面はほぼ平坦で、P-1・3・4の内側とP-2の壁寄りにかけて硬化面が残存していた。またP-1・4の内側では焼土が、東側中央部では焼土と炭化物が散在していた。

炉 中央北寄りに位置し、床面を9.6cm程掘り込んで構築された地床炉である。不整形を呈し、長軸は86cmを測る。火床部は南側が他に比べ著しく焼土化しており、部分的に強く熱を受けた様子である。

覆土 11層に分層された。壁際にはローム質土が堆積し、平行して堆積する第1～3層中には焼土粒が少一中量混入していた。

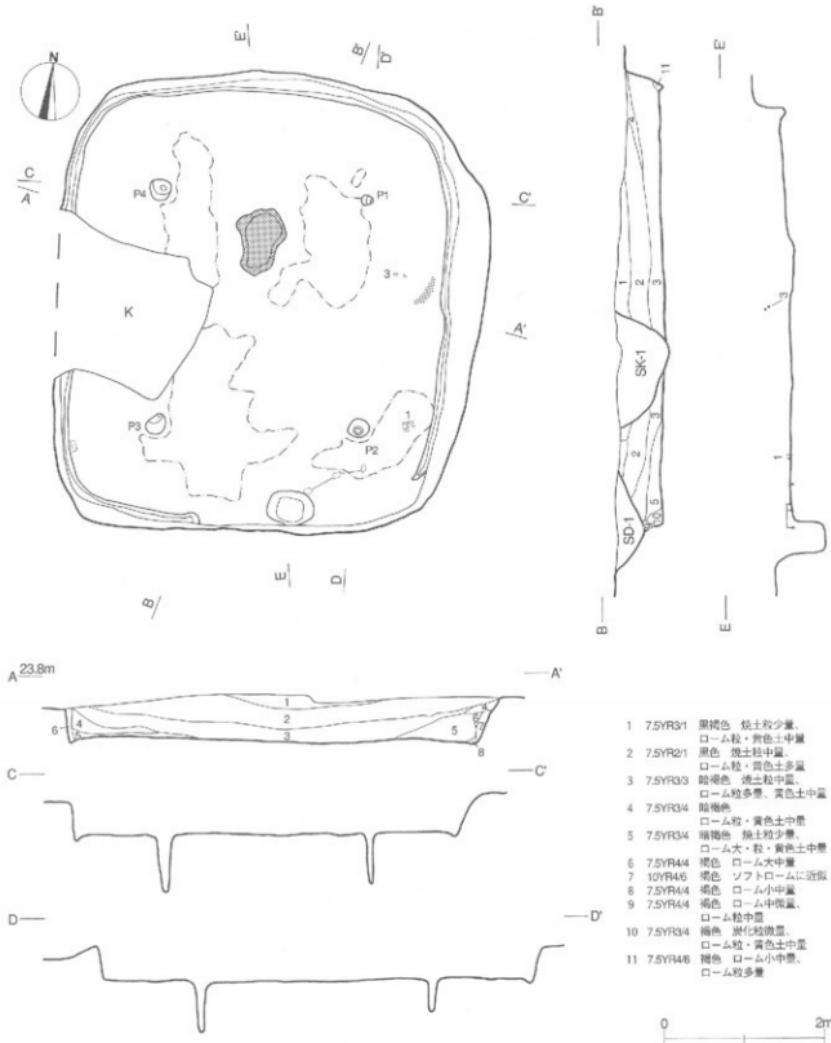
遺物 住居跡東側に散在していた。1は床直出土で1号溝南側に位置するピット内から出土した土器と接合している。3は覆土上位からの出土であった。



第7図 2号住居跡出土遺物

2号住居跡遺物観察表

No	器形 器種	法量(cm)	出土状況 残存	色調	胎土	器形・文様・整形の特徴
1	高杯 土師器	A 11.3 B (5.7)	床直上 1/2	暗赤	長石中量、雲母少量	杯部は楕円。外表面ミガキ。頭部横ミガキ。内外面ともに剥離が著しい。外外面赤色。
2	甕 土師器	A [16.8] B (3.0)	覆土	棕	長石中量、石英、雲母少量	口縁部は短く立上り外反。口唇部平壠状工具による梢円形刺突。頭部斜位刷毛目。脚部内側指捺ナデ。内面横位刷毛目。
3	台付甕 土師器	B (3.0) C [9.6]	覆土	にぶい黄棕 15%	長石多量、石英中量、雲母少量	外表面斜位の荒い刷毛目。脚部内側指捺ナデ。胴内部ヘラケズリ。底面に刺突。
4	甕 土師器			灰黄褐	長石中量	外傾する器形。口脣部先の細い工具で刺突。外表面ナデ。
5	甕 土師器		にぶい黄棕	混入物ほとんどなし 緻密		外傾する器形。口脣部平坦面を形成。外表面輪積痕が残る。内面横位刷毛目→ナデ
6	甕 弥生土器		にぶい褐	石英多量、長石中量、雲母少量	附加条L R+R R R	附加条R L+R 羽状。
7	甕 弥生土器		にぶい褐	長石・石英・砂粒多量、雲母少量	L R	附加条R L+R 羽状。
8	甕 弥生土器		にぶい褐	長石・砂粒多量、雲母少量	附加条R L+R 羽状。内面剥離著しい。 L R	附加条R L+L、R L+L 羽状。
9	弥生土器		灰褐	長石・石英多量	L L L R	



第8図 2号住居跡

所見 住居跡の形状とが跡の位置から南側が入り口部と想定される。時期は床面より出土した1から古墳時代前期前葉に相当しよう。

3号住居跡（第9・10図 PL 3・5）

位置 C-E-4・5グリッドに位置し、南側で1号溝と重複する。本跡のほうが占い。

規模・形状 長軸5.14m、短軸4.56mの横長の隅丸方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは38cmを測る。

主軸方向 N-32°-W

ピット 5ヶ所検出された。配置からP-1・2は柱穴、南東壁際は貯蔵穴と思われる。柱穴は円形を基調とし、P-1は径27cm、深さ13.9cm、P-2は径29cm、深さ37.1cmを測る。貯蔵穴は楕円形を基調とし、径72cm、深さ22.1cmを測る。覆土上層に遺物が出土していた。他2つのピットは円形を基調とし、大きな方は径57cm、深さ17.8cm、小さな方は径22cm、深さ16.6cmを測る。

床 やや起伏を有している。炉跡の周囲、P-1と貯蔵穴の間、P-2の外側に硬化面が見られた。

炉 中央奥壁寄りに、床面を8.6cm程掘り込んで構築された地床炉が位置する。不整枠円形を呈し、長軸1.21mを測る。火床面は被熱のため焼土化しており、起伏を有していた。

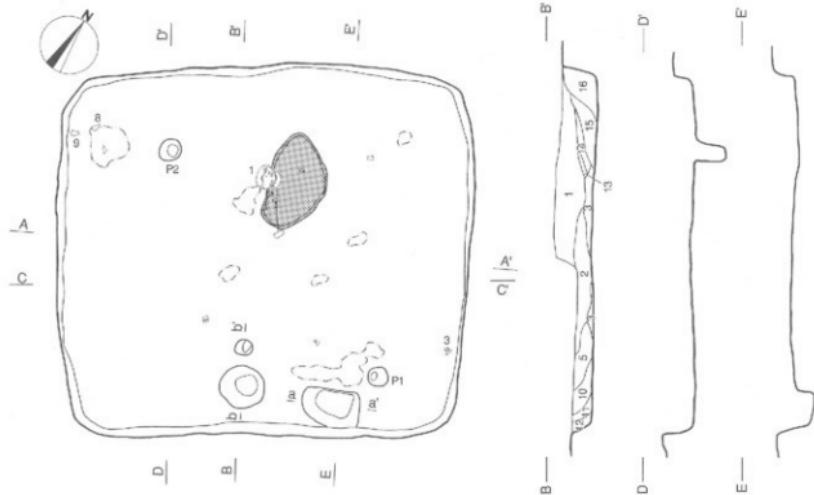
覆土 16層に分層された。第10・11層にのみ焼土粒が微量に混入していた。

遺物 住居跡全体の覆土上位から床面にかけて散在していた。1は赤彩されたほぼ完形の収形土器で、炉跡西側にあり、口縁部を炉側に向て倒立した状態で出土した。3は東壁際の覆土上位、8・9は西壁際の覆土下位から出土している。

所見 住居跡の形状と炉跡の位置から南東側が入り口部と想定される。時期は炉跡脇の床面直上より出土した1から古墳時代前期前葉に相当しよう。

3号住居跡遺物観察表

No	器 形 器種	法量(cm)	出土状況 残存	色 調	胎 上	器形・文様・模様の特徴
1	壺 土師器	A 14.8 B 28.3 C 9.8	伊直上 元形	に赤い赤褐	長石中量、石英少量	外面赤彩。胴部中央がやや流れ気味に張り出し、ここを最大径とする。口縁は外反し、頂部からの立ち上がりが高い。底辺は口縁よりやや小さい。口縁～腹部縁ミガキ後、細かな墨書き工具による横ナデ。胴上半ナデ。胴下半縁ミガキ。内面ヘラナデ。
2	壺 土師器	B(4.4)		極	長石多量、石英・雲母少量	胴上半部、頸部右～左にかけて刷毛目。左～右にかけて斜位ミガキ。頸部縱方向刷毛目～沈線状のナデ。木薙状工具による斜位側突、内面ナデ。
3	高杯 土師器	A [19.8] B(5.6)	覆土上 1 / 8	明赤褐	長石中量、石英・雲母少量	内外面赤彩。内外面にミガキの痕跡が一部みられる。
4	高杯 土師器	B(2.7)	1 / 8	淡黄	長石・雲母中量、石英少量	腹曲位縦ミガキ。脚との接合部直上は同心円状にミガキ。内面ナデ。
5	壺 土師器	B(0.9) C[8.7]	に赤い黄褐	長石中量、石英少量	底面無文。内外面ナデ。	
6	壺 土師器		に赤い黄褐	長石中量、微密	外傾する器形。口凹端部に横円形剥空。外縁輪積痕がある。	
7	壺 土師器		に赤い黄褐	長石中量、微密	外傾する器形。口凹端部に横円形剥空。外縁輪積痕がある。	
8	壺 弥生土器		覆土下 に赤い褐	石英・長石多量、雲母少量	附加基しR+RとR L+Lの羽状。内面剥離が著しい。 R R L L	
9	壺 弥生土器		覆土下 に赤い褐	石英・長石多量、雲母中量	附加基、輪不明瞭。恐らくしし+IとL r +r の羽状。 内面剥離が著しい。 I I r r	
10	壺 弥生土器		に赤い赤褐	長石中量、雲母少量	附加基、輪は不明。L+Iを付加、燃り戻しのため乱れる 内面剥離が著しい。 I	
11	壺 弥生土器		灰褐	石英・長石多量	附加基、R L+L I I	
12	壺 弥生土器		に赤い赤褐	石英多量、長石・雲母少量	附加基、輪は不明。 + I I	
13	壺 弥生土器		に赤い赤褐	長石・石英多量、雲母少量	附加基、輪は不明。 + r 羽状、内面剥離が著しい。 r	
14	杓鍤身	径: 4.4 厚 1.6	I / 2	暗灰	長石中量	無文。全面良好に研磨。片側から穿孔される。圓孔側中央部がやや盛り上がり、穿孔の出口と思われる。



A 23.7m

C —

—A'

—C'

a-a'
1 7.5YR4/3 棕色 粘土粒・炭化粧、ローム大少量、
ローム中少量、粒中量
2 10YR4/6 棕色 ローム大少量、ローム中中量、
ローム粒極めて多量

b-b'
1 7.5YR4/4 棕色 ローム大少量
2 7.5YR4/6 棕色 ローム大少量
3 7.5YR3/4 端褐色 ローム中少量

- 1 SYR2/2 黒褐色 ローム粒微量
- 2 SYR2/2 黒褐色 ローム小・粒微量
- 3 7SYR4/6 褐色 ローム中・粒中量、少少量、
黑色土粒中量
- 4 7SYR3/2 暗褐色 ローム粒微量
- 5 7SYR3/2 暗褐色 ローム少少量
- 6 7SYR5/4 にべー褐色 ローム中・粒微量
- 7 7SYR5/4 にべー褐色 ローム中・粒中量
- 8 7SYR4/4 棕色 ローム少少量、粒微量
- 9 7SYR4/6 棕色 ローム少少量、粒少量
- 10 7SYR3/6 棕褐色 粘土粒・ローム少・粒微量
- 11 7SYR4/3 棕色 粘土粒・ローム粒・黑色土粒微量
- 12 7SYR4/4 棕色 ローム大・中少量
- 13 7SYR2/2 黒褐色 ローム粒少量
- 14 7SYR3/3 暗褐色 ローム粒中量
- 15 7SYR4/3 棕色 ローム小・粒中量
- 16 7SYR4/4 棕色 ローム中・粒中量

a —

—a'

b —

—b'

a 23.2m

—a'

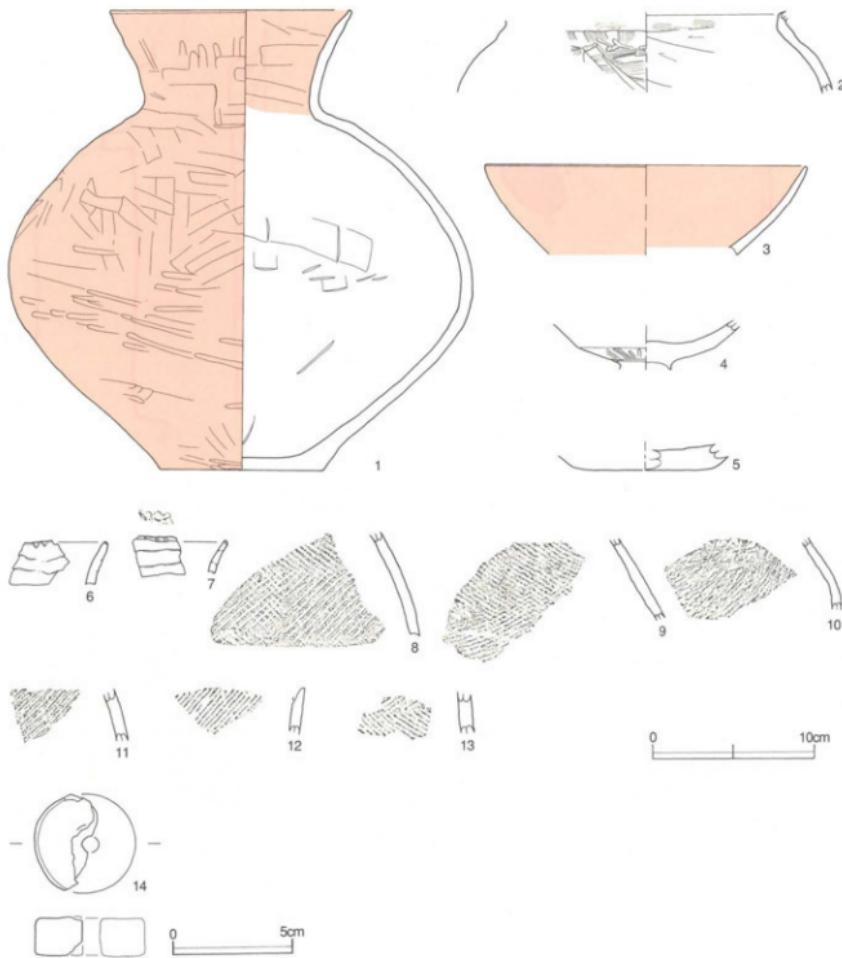
b 23.2m

—b'

0 2m

0 1m

第9図 3号住居跡



第10図 3号住居跡出土遺物

4号住居跡（第11・12図 PL.4・5）

位置 調査区南端D-E-6・7グリッドに位置する。住居跡東半は試掘調査時のトレンチにより壊されている。

規模・形状 試掘調査時のトレンチにより壊されているため全貌は不明だが、おそらく方形を呈すると思われる。長軸3.9m、短軸3.2m、壁は緩やかに立ち上がり深さ17cmを測る。

ピット 試掘調査時のトレンチを挟んで西側に3ヶ所、東側に2ヶ所検出された。規模・深さ・配置からいはずれが柱穴かの特定は困難であった。西側の3ヶ所は不整形。楕円形を基調とし、径は21~26cm、深さ5.4~11.1cm、東側の2ヶ所は径36~(64)cm、深さ11.1~13.6cmを測る。

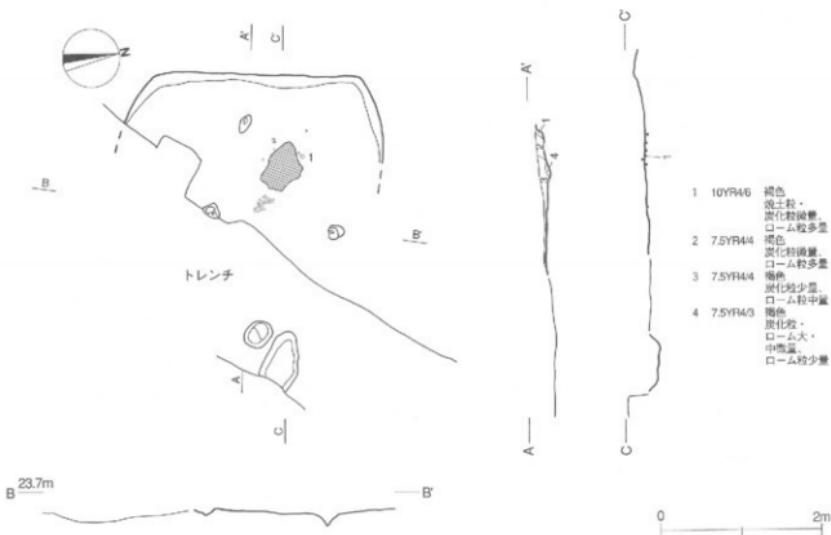
床 やや起伏を有している。炉跡の東側に焼土が散在していた。

炉 北西寄りに地床標が1ヶ所構築されている。不整形を呈し、長径は62cmを測る。床面を掘り込んでおらず焼土が2~3cm盛り上がっていた。

覆土 覆土が薄く堆積するところで4層に分層された。全体に炭化物の混入が見られた。

遺物 炉跡周辺に散在していた。1は炉跡北側床面上より出土している。

所見 時期は出土遺物より弥生時代後期後半に相当しよう。



第11図 4号住居跡



第12図 4号住居跡出土遺物

4号住居跡遺物観察表

No	器形 器種	法量(cm)	出土状況 残存	色調	胎土	器形・文様・整形の特徴
1	壺 弥生土器	A[13.0] B(4.5)	床直上 黒褐	石英多量、良石中 量、雲母少量	外傾する器形。口縁部裏文帯と裏文帯の肩に次起・削欠、口 縁部側面押出し剣突の効果。 付加条、細不明だが恐らくR.L.+L I.I.	
2	壺 弥生土器		にぶい黄褐	良石中量、雲母少量	無筋R I 外傾する器形。口縁部側面押出し効果。3と同 か	
3	壺 弥生土器		黒	良石少量	無筋R I 2と同 か	
4	壺 弥生土器		にぶい黄褐	良石少量	附加条R L+L 口縁部直下片、口縁と並行に折り返し L L を有し、ここに次起と削欠。	

2. 溝

1号溝（第13・14図 PL4・5）

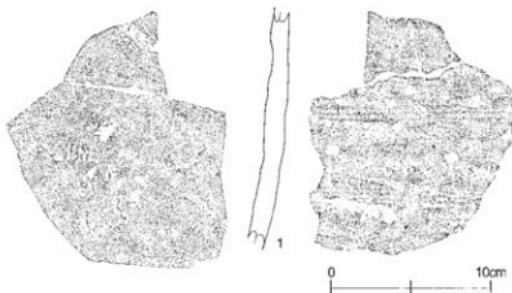
位置 A-E-4・5グリッドに位置する。1号溝の北側で2・3号住居跡と重複しており本遺構が新しい。中央付近はトレンチにより壊されている。

規模・形状 長軸は調査区東西にわたり、両端は調査区外へと延びている。全長(17.4m)、幅は最長で1.5m、最短で40cmを測り、東側にかけて幅が狭くなっている。深さは20~30cmで、東西方向で高低差は見られない。溝底面は丸みを帯びており壁は緩やかに立ち上がっている。西側坑底部にはビットが1ヶ所見られた。楕円形を呈し、長径1.2m、短径17cm、深さは12cmを測る。

覆土 東側のC-C'で焼土と炭化物が少量混入していた。

遺物 1は溝の中央部（検出範囲において）、覆土下位より出土している。

所見 台地を横断するように配置されており、何らかの境を示す溝であろうか。出土遺物などから中世の溝の可能性が考えられる。



第13図 1号溝出土遺物

1号溝遺物観察表

No	器形 器種	法量(cm)	出土状況 残存	色調	胎土	器形・文様・整形の特徴
1	壺 陶器 (常滑)		床面 灰褐	長石多量、砂粒・小 礫中量	外面タタキ→ナデ。内面間隔をあけてナデ。	

2号溝（第14図 PL4）

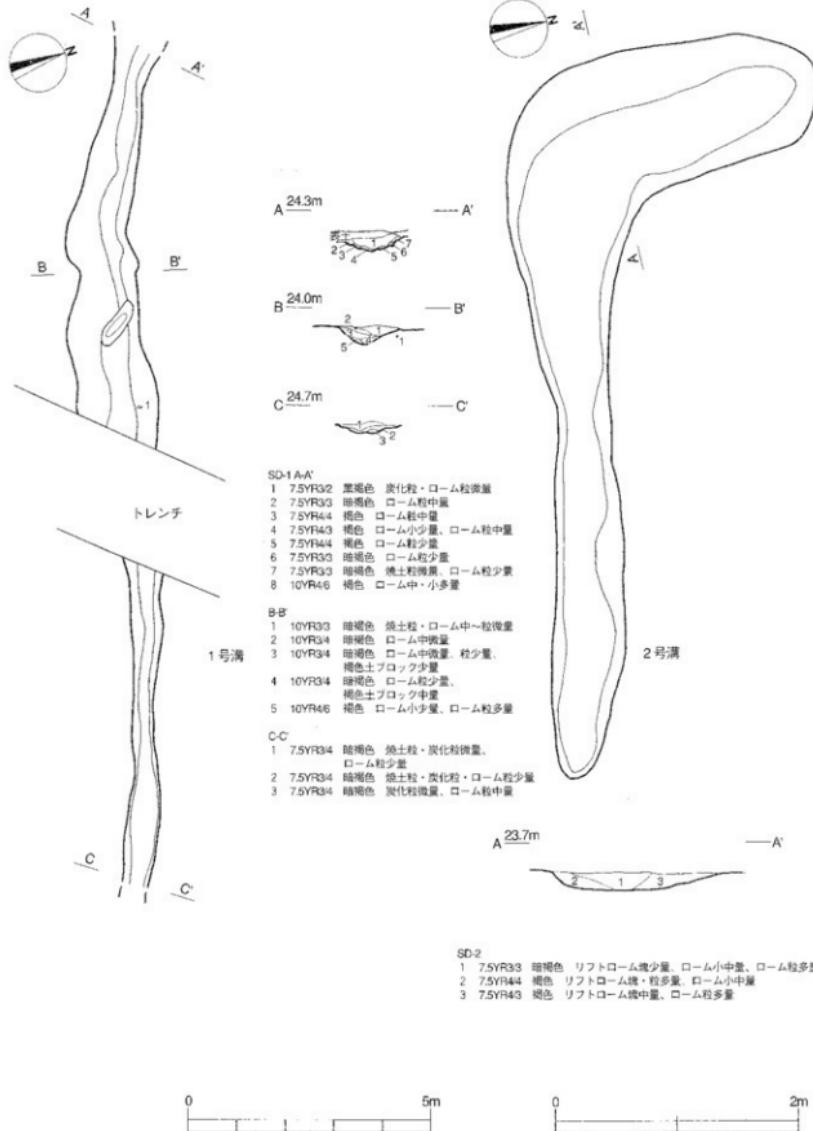
位置 B-D-3グリッドに位置する。南側で2号住居跡と重複しており、本遺構が新しい。

規模・形状 北側から東側にかけてL字状に屈曲している。長さは南北2.6m、東西5.85mで東西方向に南北方向のおよそ2倍の長さで延びている。幅は北側が1.18mで、東側に向かうにつれて狭くなり、55cm程度となる。最深部は18cmを測り、底面はほぼ平坦である。壁は底面から緩やかに立ち上がっている。

覆土 3層に分層される。全体に黄色のソフトロームブロックが混入していた。これらは埋め戻し土の可能性が高い。

遺物 少量の土師器片が覆土中より出土しているが、本遺構に伴うものではなく、図化していない。

所見 重複関係から2号住居跡より新しい中世以降の溝と考えられる。性格は特定することが困難である。



第14図 1号溝 2号溝

3. 土坑

1号土坑（第8図）

位置 B-4区に位置する。2号住居跡と重複しており、本遺構が新しい。

規模・形状 土層で確認されたため、平面の規模や形状は不明である。断面は南側が緩やかで、北側は急な立ち上がりである。深さは0.65mを測る。

覆土 ロームや炭化粒、焼土粒を僅かに含む黒褐色土で、縮まりが弱い。底面に薄く堆積している覆土は、褐色土でロームを多量に含んでいる。

所見 本遺構に伴う遺物が出上していないため、時期や性格は不明であるが、重複関係や、覆土の状況から中世以降の可能性が考えられる。

4. 遺構外出土遺物（第15図 PL.5）

本遺跡より出土した遺物はコンテナ2箱程で全体に遺物量は少なかった。図化に堪えるものもわずかで1点を図示するに留まった。試掘調査時のトレンチからの出土である。



第15図 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表

No.	器 形 器種	法量(cm)	出土状況 残存	色 調	胎 土	器形・文様・整形の特徴
1	壺 弥生土器	B(5, 0)	灰褐色	長石多量、石英、雲母少量	附加条R.L.+L. L.L. 上下圓文施文。外面炭化物付着。	

第5章 総 括

今回の調査では、弥生時代後期後葉の住居跡1軒と、古墳時代前期初頭の住居跡が3軒検出された。弥生時代後葉から古墳時代前期前半は、列島規模で人の移動が活発化する時期である。土浦周辺地域においても、附加条縄文に代表される弥生土器の特徴が消滅し、刷毛目やナデの新しい土器に急激に変わっていった。この状況から、他地域からの大きな人の移動があったことは容易に推測できる。本遺跡も古墳時代の集落は、南関東からの新しい人々によって形成された集落と考えられる。

ここでは、本遺跡の資料を中心に、花室川下流域の弥生時代後期から古墳時代前期の様相について紹介し、流入ルートを解明する資料のひとつとしたい。

1. 弥生時代

(1) 中根遺跡の弥生土器

4号住居跡は弥生時代後期の住居跡である。ここからは無文の複合口縁部下端にイボ状突起を持ち、頸部上位に附加条縄文を施文する壺の小片が出土している。羽状はみられない。この地域に多く出土するタイプで、鈴木正博氏によって「下大津式阿玉台北系列」と分類されている。(註1)

2号・3号住居跡は古墳時代前期の住居跡であるが、覆土下層から弥生土器の胸部片が出土した。ここから出土した土器の胎上には、大粒の長石が多量に含まれている。対岸の永国遺跡からも同様の胎上の大型壺が出土している。桜川流域の宍塙遺跡や天の川流域の原田遺跡群出土の弥生土器には、長石・石英・雲母が多量に含まれているが、本遺跡ほどの粒の大きさや含有量はない。第10図9・13は羽状で、縄文原体は鬼怒川中流域の二軒屋式と似た特徴を持つ。永国遺跡からも同様の弥生土器が出土しており、このタイプは長石を多量に含んでいる。2号・3号住居の弥生土器は、4号住居遺物より後出のものであろう。

(2) 花室川流域の弥生遺跡

花室川下流域は、湧水が多く谷津が発達した地域で、遺跡の密集地域である。しかし弥生時代の遺跡は少なく、本遺跡のほか、和台遺跡、永国遺跡、烏山遺跡(註2)など数遺跡にすぎない。

烏山遺跡(東台地)は河口に近い右岸台地上に立地し、住居跡が4軒検出された。土器は附加条縄文の施された複合口縁壺で、時期は後期前半に位置付けられる。

和台遺跡は、河口から約4km入った左岸台地上に立地し、住居跡が1軒検出された。土器は附加条縄文施文の複合口縁で、頸部には横描文施文や無文の壺が出土した。一部、赤彩された大型の壺もみられる。時期は後期前半に位置付けられる。土器以外では、紡錘車、糸巻型の土製品、石皿、敲石、磨石、石英片などが出土した。

永国遺跡は、和台遺跡の東0.4kmに立地する。3次にわたり発掘調査が行なわれ、報告によると第1次調査で2軒、3次調査で1軒の住居跡が検出されている。(註3) 1次調査の1軒は、古墳時代前期の土器も出土していることから古墳時代の住居の可能性もある。永国遺跡の弥生土器は、大粒の長石を多量に含む二軒屋式に近い原体で羽状縄文のタイプと、十王台式系の横描文や陰帯を持つタイプが出土している。十王台式系と判断した土器は頸部のみで、十王台式の特徴である附加条二種施文の胸部は出土していない。他に口縁部に輪積痕を残し、輪積痕上に附加条縄文を施文したほぼ完形の壺が出土した。器形からみても在地の系統ではない。この壺が出土した住居跡は、古墳時代前期の上層部が多い。1次調査の弥生土器は弥生時代最終末期に位置付けられる。3次調査で発見された住居跡は床面積8m²程度で、遺物は弥生土器小片のみである。また3次調査でも古墳時代前期の住居跡から弥生土器が出土している。この土器は大型の壺で羽状縄文である。しかし、原体は二軒屋式系ではなく、また、胎土も大粒の長石を多量に含むものではない。

他には、馬道遺跡、内根A遺跡、西根宮脇遺跡などが踏査などで確認されている程度で、遺跡数は少ない。また、縛まつた集落も未確認である。

2. 古墳時代

(1) 中根遺跡出土の土師器

1号住（第5図）2は、内外面赤彩された小型高杯の口縁部である。胎土は黒味を帯びており、1～2mmの橙色の粒を多量に含んでいる。埼玉県春日部市の尾ヶ崎遺跡やさいたま市猿山遺跡からは、同様の土器を碎いたような橙色の粒子を混入した土師器が発見されている。（註4）この粒は大宮台地周辺の全部の土器にみられるものではなく、同一の遺跡でも混入していない土器がある。よって、何らかの意図をもって混ぜたものであろう。橙色の粒が混入された土器は、市内では桜川左岸の大宮前遺跡でも発見されている。（註5）大宮前遺跡では赤彩された直口壺に多量に混入され、共伴の輪積痕を残す壺にも僅かだが混入がみられる。

2号住（第7図）1は、内外赤彩された小型高杯の杯部である。内側して立ち上がり、口唇部は弱い面をもつ。内外面に斑点状の剥離が激しい。1号住2のような橙色の粒は含まない。2は刷毛状工具による刻み目をもつ壺、3は台付壺の脚部である。2は台付壺の可能性がある。4・5は壺の口縁で、4は口唇部にヘラ状工具による細かく雑な刻み目がみられ、ナデ調整である。5の口唇部は面取りされ外面に輪積み痕がみられ、内面には刷毛目が施される。5は大宮台地から印塙沼西岸に多くみられるタイプで、台付壺と思われる。この他に図化していないが、1号住2のような橙色の粒を多量に含んでいる壺が出土している。

3号住（第10図）1は、炉直上から出土した赤彩された壺である。ミガキの後、一部刷毛状工具によるナデ調整が行なわれている。胴部中位に最大径をもつ。2の壺は、肩部に烈点文がみられる。3の高杯は、赤彩されて器形は僅かに内側するタイプである。4の高杯は杯部下端に棱を持つ。6・7の壺は口唇部に刻み目が見られ輪積み痕を残す。この壺は2号住の5とは別系統と思われ、印塙沼周辺の弥生土器である臼井南式の系統かもしれない。

(2) 花室川流域の古墳時代前期の様相（第16図）

花室川下流域の弥生時代集落は、先に述べたように極めて少ないが、古墳時代になって形成され始める。遺跡を見ると、本遺跡の他に、鳥山遺跡（東台地）、水峰遺跡、堂場台遺跡、和台遺跡、内出後遺跡、永国遺跡などで初期段階の集落を確認することができる。この時期の集落は谷津の奥まった台地上に多く、未だ小規模である。

和台遺跡では住居跡が1軒検出され、台付壺や二重口縁壺、ナデ調整壺などが出土した。炉には、本遺跡1号住と同様、壺の胴部片が埋められていた。永国遺跡は、第3次調査において1軒検出された。ここからは胴部に単節繩文が施された壺など、過渡期の土器が出土した。また、口縁部下端に凸帶を巡らす特徴的な小形鉢が数点出土しており、系統を考える上で重要な資料である。鳥山遺跡（東台地）からは、住居跡が1軒検出され、ナデ調整の壺などが出土した。上総地域との関連がうかがえる土器である。内出後遺跡、平坪遺跡、水峰遺跡からは、棹状浮文のついた装飾壺、堂場台遺跡からは、口縁部に輪積み痕を残す台付壺や、被籠壺が出土した。（註6）

次段階になると、鳥山遺跡の西台地と東台地では、古代まで継続する集落が形成される。注目されるのは西台地で発見された玉作工房跡である。メノウの勾玉、碧玉などの管玉の工房跡で、メノウの勾玉工房跡としては、市内の八幡脇遺跡（註7）とともに全国で最も古く位置付けられている。東台地では、20軒近い住居跡が発見されている。向原遺跡は、古墳時代後期まで継続する集落が形成され、前期61軒を含む住居跡90軒と終末期の方墳2基が検出された。前期が中心の集落である。ここでは8世紀以降の住居跡は確認されず、古墳の築造をもって土地利用が終了している。（註8）

古墳時代中期や後期の集落も多く、密集地域となっている。特に5世紀後半から7世紀初頭にかけての集落が多い。内出後遺跡や、水峰遺跡もこの時期が中心である。

古墳をみると、前方後円墳では6世紀代のひさご塚古墳がある程度で、それ以外は戦時に埋没した五重古墳に、その可能性が考えられている。他には、埴輪をもつ中山古墳群や馬道古墳群、南途中古墳、終末期方墳群の石倉山古墳群、向原古墳群、守家ノ後B古墳群が存在するが、現在のところ前期と中期の古墳は未確認である。

3.まとめ

花室川下流域における弥生時代の遺跡は、古墳時代と比べると極めて少なく1軒を超える集落は未確認である。本遺跡も調査区外での遺物散布は少なく、広範囲に展開する状況は確認できない。この一帯は分布調査や踏査、多くの発掘調査、試掘、確認調査が行なわれており、未発見の弥生遺跡が数多く存在しているとは考えにくい。(註9) 現状においては弥生遺跡が少ない地域と言えるであろう。微高地などの低地に存在する可能性について、当エリア一帯には、台地から延びる低位の段丘や緩斜面、下位段丘がみられるが、そこから弥生時代の遺構、遺物が発見された例は現在のところない。(註10) 市内で弥生遺跡が密集している天の川流域や穴塚大池周辺は、同じように谷津が発達している地形である。しかし同環境の花室川下流域に遺跡が少ないので、何らかの要因があるのかもしれない。

弥生終末から、古墳時代初頭にかけて所謂南関東から人の流入が始まる。花室川下流域にも本遺跡をはじめ、いくつかの遺跡で初期の集落がみられる。本遺跡をみれば、大宮台地周辺の土器に類似点がみられることから、この地域からの流入であろう。鳥山遺跡では、上総系の土器が出土しており、印旛沼周辺を経由して入り込んだ可能性がある。また、花室川の北に流れる桜川下流域の遺跡からは、北陸系の土器が出土している。これらの状況から、土浦地域には多方面からの流入が考えられる。

古墳時代前期以降に集落が増加する状況は、人が入り込み、やがて定着したためであるが、その要因として安定した生業活動が考えられる。この地域の谷津の発達は、豊富な湧水によって形成されたもので、この湧水を利用した水田耕作と、霞ヶ浦や花室川での漁撈が主要な生業であろう。河口から約4kmまでの古墳時代の遺跡からは、例外なく大量の土玉が出土している。この地域の古墳時代における集落のあり方は、豊富な水資源の活用によるものと思われるが、弥生社会については、これらの資源を活かす技量が欠如していたのか、或いは、必要としない社会であったのかもしれない。



第16図 花室川下流域の弥生時代・古墳時代前期集落跡

註

- (1) 1999 鈴木正博 「本邦先史考古学における「土器形式」と縦横の「推移的閉包」」『古代』106号
早稲田大学考古学会
- (2) 烏山遺跡は3箇所の尾根状台地に存在し、3次調査まで行なわれている。西と中央の台地は国士館大学と茨城県教育委員会（第1次・2次調査）、東の台地は茨城県教育委員会によって調査された。（第3次調査）
1975 西宮一男他『烏山遺跡』茨城県住宅供給公社
1980 大川 清編『烏山遺跡』土浦市教育委員会
- (3) 永国遺跡は3次調査まで行なわれている。1次調査は日本窯業史研究所、2次・3次調査は土浦市遺跡調査会によって調査された。
1983 大川 清編『永国遺跡』日本窯業史研究所
2008 渡田恵・『永国遺跡（第3次調査）』土浦市教育委員会
- (4) さいたま市立博物館で展示していた篠山遺跡の土器をみたところ、中根遺跡と同様の橙色の特徴が確認できた。
1983 笹森紀巳子『尾ヶ崎遺跡』庄和町尾ヶ崎遺跡調査会
1988 笹森紀巳子『篠山遺跡』『中里遺跡 篠山遺跡』大宮市遺跡調査会報告 別冊4 大宮市遺跡調査会
- (5) 2004 田口 満『大宮前遺跡』土浦市教育委員会
- (6) 堂場台遺跡は中新台遺跡の南に位置する遺跡である。報告書では台付堀と器台の2点を紹介している。
1996 橋場君男『中新台遺跡』土浦市教育委員会
2008 黒澤春彦『茨城県出土の輪積底をもつ甕』『生産の考古学2』
- (7) 2009 田口 満『八幡塚遺跡』土浦市教育委員会
八幡塚遺跡では、玉作り工房跡のほか、鍛冶工房跡も発見されている。
- (8) 1987 中野修秀他『向原遺跡』土浦市教育委員会
- (9) 花室川下流域は発掘調査事例が多い地域である。昭和では永国遺跡、烏山遺跡、向原遺跡、摩利山遺跡、寺家ノ後遺跡群など住宅団地造成や工場建設による発掘調査が行なわれた。また、桜土浦インターチェンジ建設において下広岡遺跡が調査された。平成になってからは、念代遺跡、平坪遺跡、南丘遺跡、西郷遺跡、長峰遺跡、宮前遺跡など道路工事に伴う測量、峰崎遺跡群、刷ノ台遺跡、神出遺跡群、永国遺跡（第3次）、谷原門C遺跡、六十原遺跡、六十原A遺跡など住宅団地造成に伴う調査、本遺跡や内出後遺跡、和台遺跡、阿ら地遺跡、形部遺跡、中新台遺跡、二又遺跡など、建物建設や運動施設建設による測量が行なわれた。また、試掘確認調査も多く行なわれている。
- (10) 台地直下の低い箇所について、数箇所だけが試掘確認調査を行なっている。橋下遺跡は、標高14~10mの緩斜面上に立地し古墳時代から平安時代の遺物が散布している。2回確認調査を行なったが、土砂が1m以上堆積し、その下はシルト層である。シルト層の上面から須恵器や内耳鏡などが出土した。調査では遺構は確認されず、軟弱な基盤と水が漲くことから住居等が構築される環境ではない。遺物は、台地上の内出後遺跡からの流れ込みと思われる。中居遺跡は、標高8m、低地との比高差4mの狭い下位段丘で、表土の下にはロームが堆積している。ここからは平安時代の住居跡やテラス状遺構が発見された。神出遺跡の北側の谷も試掘したが、土砂が厚く堆積し、遺構・遺物は発見されなかった。

第6章 おわりに

中根遺跡から4軒の弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落跡が検出された。花室川流域は該期の集落が希薄な地域のため、わずかでも資料の増加となり得た意義は大きい。

古墳時代前期の住居跡はいずれも隅丸方形を呈し、1・2号住居跡は縦長で3号住居跡は横長であった。周溝は2号住居跡にのみ見られた。柱穴は中根遺跡と同様に花室川右岸に位置する向原遺跡の例を見ると4本柱が主流であるが、本遺跡で確実に該当するのは2号住居跡だけであった。入り口部は向原遺跡では南東から南北方向にかけて集中しており、中根遺跡も同様であった。調査面積に対して住居跡がほとんど空白部なく配置されており、調査区外にわたっても広く住居跡が分布していたであろうことは十分に考えられる。

遺物は残念ながら住居跡の魔絶に伴いほとんどが持ち出されてしまっているが、3号住居跡より出土した壺は注目される。器形は胴部中位がやや潰れ気味に張り出し、ここを最大径としている。口縁部は外反して立ち上がり、比較的頸部からの立ち上がりが高くなっている。底径は口径よりやや小さく器形的には弥生後期の様相を色濃く残している。整形はヘラミガキとヘラナデで行われており、これら器形と整形の特徴から弥生時代後期と古墳時代前期の境境期に相当する土器と思われる。

本書が花室川流域の古代史の解明に少しでも役立つことができれば幸いである。

本書の作成にあたり多くの方々のご協力を得、ご指導、ご助言をいただきました。文末ながら厚く感謝の意を表します。



試掘状況

報 告 書 抄 錄

写 真 図 版



調査前状況(北から)



調査終了全景(南から)



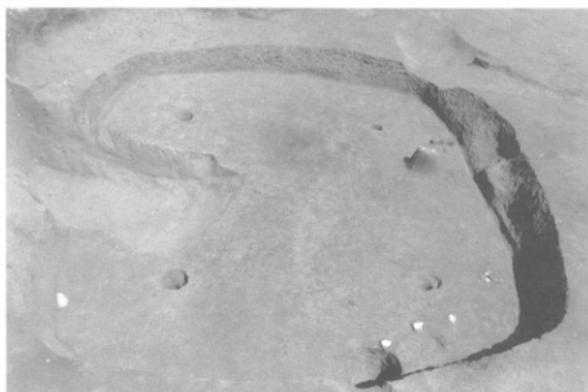
調査終了全景(北西から)



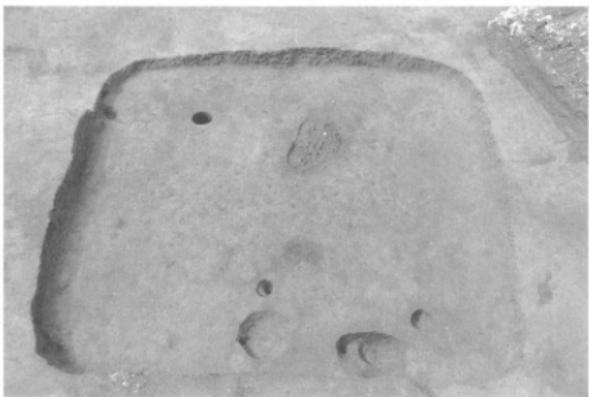
1号住居跡完掘



1号住居跡遺物出土状況

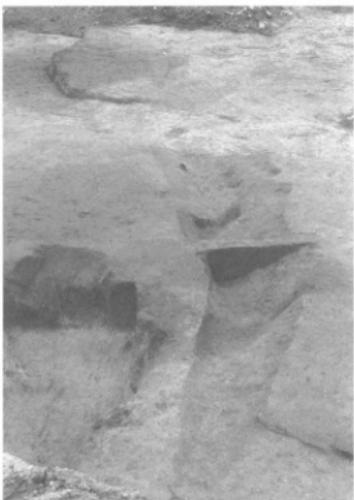


2号住居跡完掘

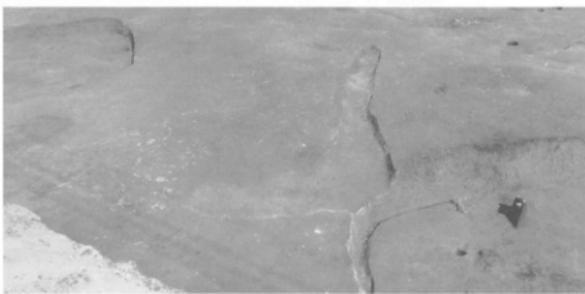




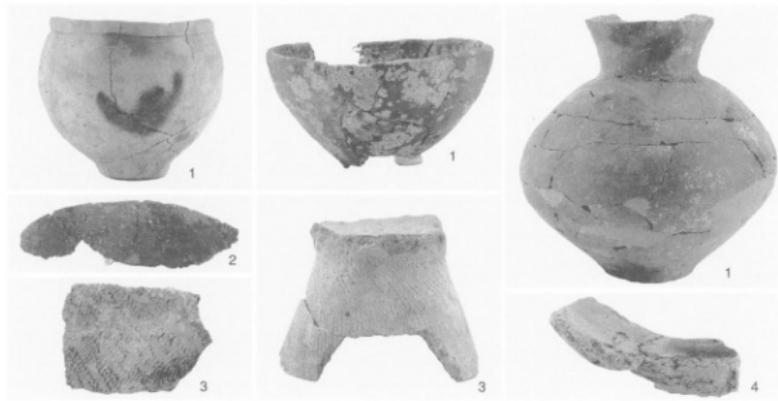
4号住居跡完掘



1号溝完掘



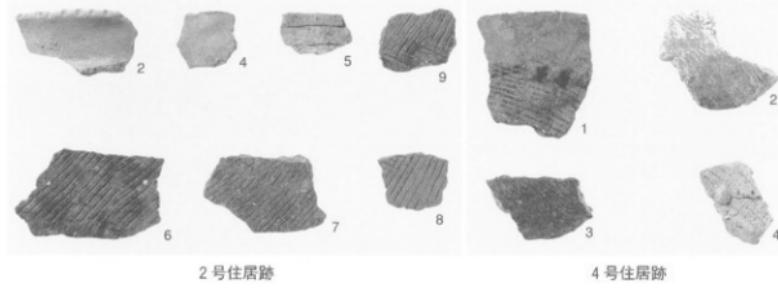
2号溝完掘



1号住居跡

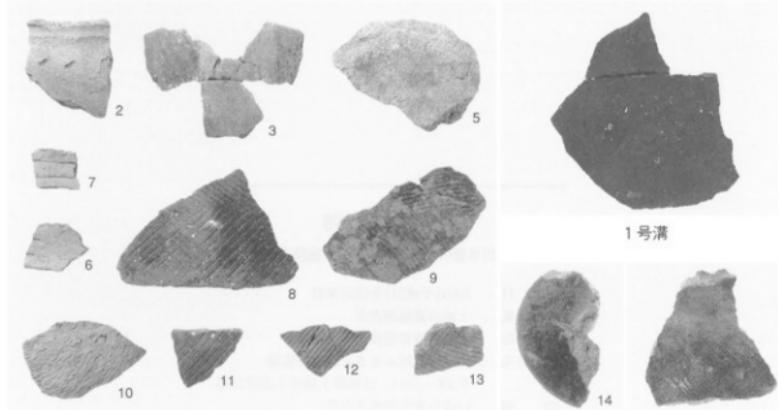
2号住居跡

3号住居跡



2号住居跡

4号住居跡



3号住居跡

3号住

遺構外

出土遺物

中根遺跡

—店舗建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2009(平成21)年10月30日
編集 土浦市遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
問合せ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
印刷 いばらき印刷株式会社
